

東北薬科大学 一般教育関係論集11号 別刷 (1997)

アネット・B・ワイナー、
ジェーン・シュナイダー編『布と人間』

山 下 剛

アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュナイダー編「布と人間」

山下 剛

1

「布と人間」は、このところ研究の進展と深化が著しいジェンダー論に立脚した文化人類学ないし比較文化論の一大成果である。この論文集はアメリカ合州国ニューヨーク州トラウトベックで1983年に開催された学際的な研究会議が契機となって成立したものであり、寄稿者の多くがアメリカ合州国に本拠を置く女性研究者であることもこの論文集の大きな特徴となっている。

「布と人間」が意図するところは、「まえがき」と「第1章 序論」に明確に述べられている。「私たち（編者・・・評者注）は、[・・・]世界的規模で、支配と自治、富裕と貧困、政治的正統性と継承、そしてジェンダーと性愛（セクシュアリティ）に関係した複雑な道徳的および倫理的問題が、布をとおして表現するしかたをすでにもっていることを確信したのである。」

(p.11) 「本書は、布の社会的そして政治的な貢献を支えている布そのものの特性とはどのようなものか、人々がこれらの特性を認め布に意味を与える儀礼的・社会的領域にはどのようなものがあるのか、そして、時間とともに意味がどのように変容するのか、を明らかにしようとするものである。」

(p.17)

全体は「第I部 小規模社会における布」、「第II部 資本主義と布の意味」、「第III部 大規模社会における布」の3部構成であり、それぞれが複数の章を含んでいる。翻訳本における総ページ数は620ページにおよんでい

る。「第1章 序論」を除く全部で11の章で取り上げられる地域・国家もかなりの部分に上り、それぞれが論者の多様な視点から論じられているが、一方で特にイスラム文化圏、中国、ロシアならびにその周辺地域等を扱った論文がほとんどないという偏りも見られる。これは寄稿者の多くがアメリカ合州国の研究者であるという事情にもよると思われるが、その意味で『布と人間』は良くも悪しくもアメリカ合州国の視点を反映したものであると言える。またこれは、そもそも文化人類学の成立が主に19世紀以降の西欧列強による植民地主義と深い関係にあったことを図らずも窺わせるものであり、学問の客観性とは何かという問題に通じかねない危うさをはらんでいる。真の意味での国際化、国際理解を進展させるために文化人類学的アプローチは非常に有効な視点を多々提供してくれるが、サイドが『オリエンタリズム』で主張するように、近代の西欧中心主義的視点の再検討とその超克が、文化人類学の今後の大きな課題として残されているように思われる。

個々の章は相異なる著者による独立の論文であり、同じ部の前後の章とはゆるやかな関係で結ばれている。そして、文化人類学、美術史、歴史学、民族学等、多方面からそれぞれ啓発的な論が展開されている。しかし、一つの論文に様々な情報を盛り込もうとするあまり、ときに話題が錯綜し、論旨が明晰であるとは言いがたい場合も少なくない。その事情を考慮してか、二人の編者が「第1章 序論」で、「布と人間」の諸相を論じる個々の論文の内容と論文間の関係を手際よくまとめており、非常にすっきりとした全体の見取図を提示してくれている。

編者二人は、「布の研究は、他のやり方では見過ごされてしまう、社会および政治組織への女性の貢献を明らかにすることができる」(p.21)と述べ、自分たちの研究の意義を主張している。確かに、布の製造、贈与と交換、支配に関して、また着る者のアイデンティティや価値観を明示したり隠蔽したりする衣服としての布に関して、世界的に男女の役割分化がしばしば極めて

明瞭であるため、「布と人間」をめぐる問題にはジェンダー論の視点が極めて有効であることがわかる。フェミニズム思想批評の大越愛子氏によれば、「フェミニズムは、ジェンダー概念の登用によって、その告発的形態を中和させ、その闘争的側面に違和感を持っていた女性たちや男性たちを、フェミニズム言説の中へと巻き込んでいくという画期的な、認識変換を行った」（『フェミニズム入門』、ちくま新書、1996年、p.165）という。その意味では、主に女性の手に成るこの『布と人間』も、男性読者にも抵抗が少なく読める内容となっており、現在のジェンダー論的文化人類学ないし比較文化論が到達した一つの頂点を成していると言っているといいたいだろう。

評者は広く東西の文化比較に関心を抱く者であるが、西欧近現代の文学・文化を主たる専門としているので、本書評では特に西欧近代に関わる第Ⅱ部のジェーン・シュナイダーによる「第6章 ルンペンシュティルツキンの取引き——初期近代ヨーロッパにおける民俗と亜麻布製造の商資本家による強化増大」(pp.267~318)と、リンダ・ストーン＝フェリアによる「第7章 紡がれた美德、愚かなレース細工、そして逆に巻かれた世界——女性の手仕事に関する一七世紀オランダの描写」(pp.319~358)を取り上げることにする。

2

マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で詳述しているように、ヨーロッパの資本主義の成立と発展には、キリスト教、特にプロテスタンティズムの影響が大きいとされる。しかし広く言えば、ヨーロッパの資本主義を支えるのはユダヤ・キリスト教的父権社会であると言えるだろう。

資本主義は従来の主従関係に基づく封建的な社会秩序を、企業家と労働者

との関係を軸にして作り変え、そして様々な事物にまわり付いていた既成の象徴体系を打ち崩す脱神話化の動きをともなったが、しかし近代資本主義社会でもユダヤ・キリスト教的父権社会は厳然として存続していた。ただ、それがあまりに一般化していたために、これまでの男性研究者中心の視点の下では資本主義社会における女性の役割や、女性をめぐる様々な問題点や矛盾が抑圧され、隠蔽されてきたのである。

資本主義社会においては経済効率を高めるために布の一連の製造過程が企業家による家父長的な強力な統制の下で断片化され、そして労賃が低くてすむ女性が積極的に雇用されて男女の役割が分断されるとともに、女性労働は男性労働以上に徹底した搾取にさらされることになった。

このような経済効率優先の社会では、女性による布の製造行為や布そのものに伝統的に受け継がれてきた神話や象徴体系が崩れ、新たな価値観との間でむずかしい対立と矛盾が生じてくる。第6章と第7章は、初期近代ヨーロッパにおけるこの事情を、民話や絵画等に着目して論じている。

シュナイダーは第6章の前半で、初期近代ヨーロッパにおける亜麻布製造の振興が、地方の人々に雇用を提供して貧困を救った様子、男女の出会いの機会を提供することで結婚と人口の増加を促す働きをした様子、また賞罰や歩合制の導入が生産者の生産意欲や虚栄心を高め、亜麻布製造に携わる女性たちが企業家のもくろむ生産体制にさらに深く取り込まれていく様子を述べている。また、後半では紡ぎ民話「ルンペンシュティルツキン」やヨーロッパの民俗を取り上げ、従来は見返りを要求することなく紡ぎ手である女性に助力を提供してきた精霊が、見返りに第一子を要求する悪魔的な存在に変容していった背景を考察している。そして筆者はそこに、17、8世紀ヨーロッパにおける亜麻布産業の増大にともなう亜麻栽培や亜麻布製造の行き過ぎ、さらにそれにともなう危険に関する農民の側からの異議申立てと警告を見て

いる。

前半は初期近代ヨーロッパ社会の社会学的・経済学的分析である。そこで述べられる貧者への施し、仕事の奨励、結婚や出産に対する祝福という企業家の意図がどれもキリスト教信仰と結び付いているように、初期ヨーロッパの資本主義体制を背後から強力に支えたのは、他ならぬキリスト教のイデオロギーだったことがわかる。後半は妖精や魔女や悪魔をめぐる民俗学的分析である。そこではキリスト教以前のアニミズム世界がキリスト教世界とは明らかに異質なものとして捉えられている。

筆者は意識的にか無意識的にか、強力な男性原理が支配する一神教的キリスト教と、女性原理が支配的である汎神論的アニミズムとの二元論で世界を把握しているわけである。有能な紡ぎ手として仕事に精を出す女性は聖書で高く称揚され、近代資本主義ではそのキリスト教のイデオロギーが布製造に適応されたわけだが、筆者はそれに対抗する「紡ぎ民話」の役割を次のように述べている。「紡ぎ民話は、この『資本の浸透』の構造について、相反価値的感情のこもった注釈を加えていて、無条件の支援も、明快な反対も表さなかった、と私は考える。このうえない結婚の機会を不可能な紡ぎ仕事と対置させることで、こうした話は、結婚して地位を上げるのに労力を使い過ぎる、あるいは親によって使い過ぎさせられる貧しい娘たちに、危険が存在すると警告したのである」(pp.292~293)。これを読むと、筆者は「紡ぎ民話」を資本主義社会の問題点を告発するものというよりは、その危険に警告を発するもの、言わば対立し排除し合うものではなく、相互に補完し合うものと見なしていることがわかる。

そして最後には環境問題に話題が及んでいるが、筆者は、亜麻栽培は土壌の消耗や池と小川の汚染をもたらし、田舎の労働力を収穫、加工、紡ぎ仕事へ吸収し、そして良質の草地を亜麻と布に使い過ぎる傾向を持っていたと語り、「紡ぎ民話」は、そういった亜麻栽培と亜麻布製造が農業生計や環境に

与えた深刻な影響をも指摘しているとしている。ここでは社会的弱者である農民が女性化され、資本主義の文化に対する自然の役割を担わされている。そして被支配者である農民の世界観を反映した民話に自然を修復する期待が込められている。

ところが、例えば最近のグリム研究や民話研究からすると、民話の作り手・担い手が一義的に農民とされていることには疑問が残るし、農民に自然の聖なる力や愛と平和という女性的な原理が安易に結び付けられていることにも疑問が残る。第6章の後半では民話世界の精霊に民俗学的な蘊蓄が傾けられ、それはそれで興味深いのだが、そもそも「ルンペンシュティルツキン」という小さな民話に女性の救済や自然環境の回復の期待まで読み込むのは少々勇み足であり、やはり深読みに過ぎるのではないだろうか。筆者のもの見方は結果的に男性／女性の二元論的枠組みに囚われていて、やや画一的な印象を与える。

第7章は第6章と同じ問題意識を共有しており、ストーン＝フェリアは亜麻布製造に携わる女性のイメージが資本主義の進展とともに絵画や木版画の中でどのように変容していったかを論じている。

16、7世紀には布生産の組織化が進み、オランダでは輸入された糸を織り漂白することが中心となっていたため、家庭で糸を紡ぐことはあまりなかったのだが、肖像画に好んで描かれるのは家庭で一人紡ぎに励む女性の姿であった。筆者によれば、糸を紡ぐ女性の肖像画は、その女性の職業を表しているのではなく、その女性の貞淑さという道徳的な性格を表していると解釈すべきだという。ところで、高価で真面目な媒体と捉えられていた絵画（油絵）においては、糸を紡ぐ女性、糸を巻く女性は一貫して貞淑に描かれているのに対して、絵画よりも安価で大衆的なコミュニケーションの媒体であった木版画においては、糸を紡ぐ女性を好色で淫らに描く傾向が見られ、刺繍

をする女性やレース編みをする女性にも同様の傾向が見られるという。過剰な装飾や華美な服装に対する戒めが、そのような作業に携わる女性たちに好色、浪費、愚かさといった道徳的に否定的なイメージを与えたというのである。

また筆者は、木版画においては布製造で特に重要な紡ぎと巻きは専ら女性の仕事と解釈され、女性がしばしば淫らな性愛のイメージと結び付けられて貶められることも多かった様子を述べている。例えば、16、7世紀オランダの木版画で、紡ぎ部屋で女性の指導の下、男性が紡いだり巻いたりさせられている様子がしばしば描写されるが、そこに描かれた大騒ぎや性関係の乱れは、男女の役割が逆転し女性が上位に立った世界の無秩序を表していると解釈されている。

以上の議論には男性＝秩序・文化、女性＝無秩序・自然という二元論的な図式が見え隠れしているが、だからと言って筆者は既成の秩序に混乱を持ち込み、女性中心の新たな秩序を提示しようとしているわけではない。筆者は最後に、17世紀中期ハールレムの織りの情景においては、亜麻布産業の成功を祝福するために、織り手の小屋における男性織り手、女性の紡ぎ手、女性の巻き手が伝統的な貞淑さと結び付けられている事実も述べている。筆者自身ははっきりとは述べていないが、筆者の意図は、事象には常に善悪の二面があり、善にせよ悪にせよ、それらはいずれも男性中心のものを見方を強烈に反映していることを論証することにあると思われる。

糸を紡ぐことが貞淑な女性の美德とされたことは聖書やそれ以前の古代ギリシア・ローマ神話にまでその淵源をたどることができるが、初期近代ヨーロッパにおいて糸を紡ぎ巻く女性が高く称揚されたことには、勤勉や質実剛健を尊ぶブルジョワ階級、特に男性企業家のイデオロギーとキリスト教信仰の共犯関係を見て取ることができるだろうし、逆に糸を紡ぎ巻く女性を貶める場合も背後には同じ男性原理が働いていたと見ることができるだろう。当

時の画家や版画家はほぼすべて男性であり、絵画や版画の依頼主はブルジョワ以上の階級であっただろう。とすれば、絵画や版画には自分たちの戦略を巧みに浸透させていった支配者階級、しかも男性の視点が徹底していると思われるべきだろう。

筆者は第6章のシュナイダーと違って、事象を強引に男女の二元対立的構図にあてはめることはせず、むしろ淡々と絵画や版画の分析を行っているように見えるが、それでも男性中心の社会構造やそれが内包する差別性を十分に説得力を持って指摘している。

それにしても、経済効率を重視する資本主義が既成の象徴体系を脱神話化するだけではなくて、木版画が絵画以上にブルジョワの思惑を取り込んで、男女や上下が逆転した反社会的な象徴体系を発達させていったというのは、なかなか刺激的であり、象徴や神話なしでは生きられない人間存在というものをつくづくと考えさせられる話である。

3

ヨーロッパの近代合理主義は他者との違いを重視する理性的、能動的、競争的「男性原理」によって発達してきたが、それが20世紀後半の現代になって様々な分野で行き詰まりを見せているということが最近よく言われる。しかし、だからと言って、今こそ違いを越えて他者との平和共存をめざす自然的、受動的、平和的「女性原理」の出番だと言うのは余りに単純過ぎるだろう。一口に男性とか女性と言っても、現実におけるその中身は極めて多様であり、そこにはさらに、国家、民族、宗教、文化、階級等々、様々な差別が存在するからである。

ジェンダー論は単なる解釈のための理論ではなく、現実の社会を変えていく実践的な理論であるべきだという主張はもちろん理解できる。しかし主張

ばかりが先走って、主張の正しさを立証するために研究対象が後から選ばれる場合がまま見られる。これは本末転倒であり、理論の正しい実践とは言えないだろう。社会運動としてはともかく、ジェンダー論が学問として認知されるためには、きちんと地に足が着いた研究が是非とも望まれるところである。その意味では『布と人間』は、ほぼその要求を満たしていると言っていだろう。アメリカ合州国に比べ、日本でのジェンダー研究の歴史は決して長いとは言えない。これを期に日本人による本格的なジェンダー研究が強く望まれるところである。

最後に、日本語翻訳について一言。原書が大部なこともあり翻訳には相当な苦勞があったと思われるが、訳文が十分こなれておらず、章によって読み易いものと読みづらいものがあつた。これは必ずしも原文の文体の違いによるものではないように思う。長文は原文を尊重して読点で無理につなぐのではなく、読者の便宜を図って思い切って短文に分けるなど、何らかの工夫が必要だったのではなからうか。

なお、本書評執筆に際しては、'Man (N.S.) 25 1990' pp. 739~740に掲載された Ruth Barnes による書評も参照した。

アネット・B・ワイナー、ジェーン・シュナイダー編『布と人間』、(佐野敏行訳)、ドメス出版、1995年、620頁、7,210円(本文中、カッコ内に示したページ数は翻訳本のページ数である。)

原書: WEINER, ANNETTE B. & JANE SCHNEIDER (eds). Cloth and human experience (Smithson. Ser. ethnogr. Inqy. Ser). xvi, 431pp., illus., bibliogr. Washington, London : Smithsonian Institution Press, 1989. \$39.95